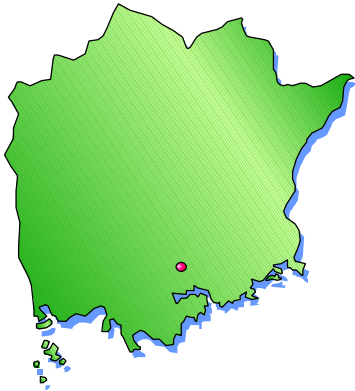


OPECA 特定非営利活動法人 岡山環境カウンセラー協会会報

2011年秋号 2011年10月5日(水) 発行



特集 東日本大震災 II

環境大臣との懇談会開催

去る2011年7月10日午後、岡山市のホテルメルパルクで環境カウンセラー協会主催(温暖化防止活動推進センターの協力)で「環境懇談会」を開催しました。

当日は、午前の県政懇談会に合わせてセットされた急な開催にもかかわらず環境省からは大臣をはじめ江田政務秘書官、徳丸中国四国地方環境事務所長、古川環境対策課長が出席。自治体からは、岡山市の田淵環境保全課長、倉敷市より長瀬環境政策課長と三宅康裕氏、津山市の米田森林課長が出席されました。ご出席各位に感謝申し上げます。

そのほかの参加者は、環境カウンセラーと県地球温暖化防止活動推進員の22名で計30名による会合でした。

藤本会長の開会の辞に続いて江田大臣が環境大臣就任の所感を述べられ、地元自治体からは挨拶とともに国連ESD会議の岡山誘致等取組の紹介がありました。

意見交換は、中平理事の司会で進み、カウンセラーからは東日本大震災復旧や港湾整備工法、バイオマス利用やメガソーラーなどの温暖化対策のほか環境教育から環境保全全般について幅広い分野の意見、提言がありました。

なかには、子供エコクラブ支援の廃止や、来年岡山で全国大会が開催される環境省のマネジメントシステム、EA21について国土交通省・農林水産省等の評価が低いことなど専門的な質問も寄せられました。

大臣からは大変丁寧な説明があり、特にCO₂削減目標の25%は「変えない」と力強い表明があり、参加者全員大臣の熱意を感じたところです。

当日は、限られた時間でしたが、後日、環境省からも提言等についての内容の照会があるなど会合は意義のあるものでした。

環境大臣との独自の会合は環境カウンセラー全国連合会としても初めてのことであり、全国の仲間にとっても活動の励みとなるものです。



環境大臣挨拶



出席者の発言



出席者集合写真

活動報告

岡山環境カウンセラー協会 会長 藤本 晴男

1. 東日本大震災支援

前回会報でご報告したように3・11には私も東京で大地震とその影響を体験しました。直にECU佐々木副理事長と現地に行き、所在不明者の安否確認や環境調査を実施。ECUの支援金募金に参加したほか内田理事も4月末福島・宮城県を訪ね活動したところです。

また、三宅会長代理も教職員組合等に働きかけ、学校とともにバイオマス利用の支援を計画中です。このほか県北の会員がリーダーを努めているエコネットワーク津山（神田理事長）は100万円を支援するなど会員の努力が続いています。

ECUでは、昨年秋の生物多様性COP10全国交流会に続く2回目の集会を10月に福島県で開催します。

本会は資力に限りがありますが、多方面の協力を得て現地支援の活動を継続したいと考えますのでよろしくお願い申し上げます。

2. 「メガソーラー」政策提言の意外な展開

東日本大震災の影響もあって懸案の再生エネルギー買取法が成立しました。

皆さんとともに訴えて来た資源・エネルギーの「地産地消」がいよいよ実現にむけて一步を踏み出します。

さて、環境カウンセラー協会の会員は、環境NPOの代表やリーダーをはじめ、大学教授などの教職員、企業・研究機関などの専門家と協力者です。協会の使命は、市民・事業者・行政の連携促進であり、政策提言も重要な活動の一つですが、その具体化には多くの方々の理解と協力を得る必要があります。長い時間を要します。

会員の皆さんに事例として話題の「メガソーラー発電」を紹介します。

今でこそメガソーラーはだれでも知っていますが、4年前はどうでしょうか。私自身も「今さら太陽光発電は…」と思っていましたが、考えを変えたのは美咲町の福田良輔氏の熱心な取り組みです。

計画を聞いてみると私たちが発信を続けて来た「エネルギーの地産地消」そのものです。

メガソーラーの具体化は地域振興に情熱を燃やしている青野高陽県議の理解が重要なステップでした。

青野県議は勉強会を開き、地域活性化の一策として県にエネルギービジョン策定を提案しました。県議会ですべて取り上げた結果、知事から計画策定の答弁を得ることができ、22年度に県庁の取り組みで計画が策定されたのです。

私も新聞の対談等でメガソーラーの発信をお手伝い。主要自治体の計画策定時に本庁舎の電力をメガソーラー発電で賄うことを提案するなど若干の応援をして来ました。

結果として県の計画に10ヶ所の立地が盛り込まれ、岡山県はメガソーラーの先進県になりました。震災後ソフトバンクの働きかけによる全国の推進協議会の会長を石井知事が努められることになり、瀬戸内市の錦海塩田跡地などが一踏脚光を浴びることになったのはご承知のとおりです。

表面には出ませんが、青野県議の働きによって岡山県が全国の注目を集めることになったとも言える訳で、もちろん県当局の理解は言うまでもありません。

今回は特異な展開となった事例ですが、政策提言には長い時間を要し、理解者と多くの協力者が必要です。

私たちが息の長い社会貢献活動を続けたいものです。

3. ヌートリア駆除の大成果

津山地区保護司会が全国で初めて自治体等と連携して保護観察対象者を雇用する就労支援事業を津山で実施しています。本会からも技術的サポートとして鳥取（前津山市農林部長）氏と藤本（保護司会就労支援担当理事）が参加しています。

5月中旬～9月中旬の4ヶ月で700匹のヌートリアを捕獲し大変な成果を上げています。

4. EA21全国大会準備会議

7月28日、岡山商工会議所で地域事務局の合同委員会が開催され、24年10月26日、岡山プラザホテルで全国交流研修大会を実施することが決まりました。本会は実行委員会の主構成団体となり、会長は実行委員会の副会長を努める予定です。

審査人は本会の会員であり、他県同様協会の全面的協力を求められると思います。今後は、事務局アドバイザーの水田氏を窓口、母体の商工会議所の要望に対応したいと考えます。

24年は、環境省からの研修受託も見込まれますので予定に入れて下さい。



捕獲したヌートリア（環境省指定特定外来生物）

東日本大震災現地（宮城・福島）視察報告

岡山環境カウンセラー協会 理事 内田 篤志

宮城県、福島県に、4月25日～28日に行ってきました。

東日本大震災が発生した3月11日、その後数日間はテレビも震災報道一色でしたが、今では、番組もほぼ通常通りとなり、原発問題を除けば、これから復興に向けてどうしていくのか？ また、どうすればよいのか？ということが報道されていました。岡山環境カウンセラー協会としても、「何かをしなければ・・・」とは協議していましたが、「とにかく現地に行って現場を見てこよう」ということで、出発しました。

私の心の中では、震災が3月11日にあり、これからは・・・、そして今後は、復興をどうするのだろうか？そういう感覚や安易な気持ちも持っていました。

ですが、現実に被災地に向かいその光景に驚愕しました。地震の凄ましい破壊力もさることながら、津波の恐ろしさは、全てのものを奪い、そしてそこにはあったであろうと思える家や車そして人を…、全てを、押し流していた状況は、本当にただ茫然と見つめるのみでした。

「震災は終わっていない、まだまだ震災中なんだ！」そういう思いを本当に、ほんとうに、再認識させられました。

宮城県や福島県の産業廃棄物協会へもお邪魔し、現在の状況について確認させていただきました。以下に簡単に要約しますと・・・

- 1 「宮城県と協会で廃棄物対策協議会を立ち上げた。県単位のことであるが、同様のことが近県(被災県)で行われている。県内は5支部(地区割)で活動であり、ガレキの撤去等の仕事⇒仮置き場への集積であり、その後は決まっていない。(山形県に運んでいる物もある。)
- 2 とりあえず近県への依頼をしているが、北海道へ運ぶ話もあるが、現実に決定はされていないし、全産連からの問い合わせもあるが、現実の動きとはなっていない。海岸沿いに産業廃棄物会社もあったので、被害は大きい。」
- 3 「福島県は他県に比べると比較的被害が少ないので、県内での処理を基本と考えている。」
- 4 原発の関係での廃棄物の今後の状況については、まったく不明。今後確認しながら対応していかないといけない。
- 5 災害廃棄物としての取扱いであり、排出者は市・県となる。産業廃棄物協会は、県と連携し対応していくこととしている。」

4月28日に帰岡し、すぐに会長に状況報告をさせていただきました。



現地での懇談(状況の確認)



校庭(仮置き場)に積み上げられた『がれき』



校庭に置かれたゴミ収集車とユンボ

報告

岡山環境カウンセラー協会 事務局長 近藤 晴巳

上半期の主な活動状況をとりとまとめました。

岡山環境カウンセラー協会活動実績 (2011年4月～8月)

定款の事業名	活動内容	実施日	実施場所
①環境問題・環境保全活動・組織運営に関する相談・助言	就労支援事業（ヌートリア駆除）協力 EMS企業支援 ・島根県建設業E A 2 1 導入支援 ・ISO14001内部監査員研修 ・E A 2 1 内部監査員研修	通期 5月 7日 7月14日 9月 6日	津山市 出雲市 雲南市 津山市
②各種の環境学習講座等への講師派遣	E S D環境学習講座（1回目） 環境保全事業団環境専門家派遣事業 環境保全事業団環境学習センター 事業者・各団体	8月29日 6月17日 6月22日 通期	岡山市 倉敷市 岡山市 県内
③環境関連事業等の企画・運営	浅口市エコフェスタ 津山市親子フェスタ 市民のエコライフ&テクノロジー 森林保全活動 東日本震災現地訪問および支援 福祉と環境をつなげてみよう講座1 福祉と環境をつなげてみよう講座2 草木染め講座1（石油の節約とゴミの減量） 草木染め講座2（外来種について考える）	6月 5日 6月19日 8月20日 通期 通期 8月 7日 8月22日 7月28日 8月25日	浅口市 津山市 岡山大学 岡山県 東北 津山市 津山市 津山市 津山市
④環境問題に関する情報交換	岡山カウンセラー協会役員会 〃 ECU平成23年度総会 香川県環境カウンセラー協議会設立総会 岡山環境カウンセラー会報発行 〃 OPECAホームページ維持管理 岡山E S D協議会 環境ひろば	7月 3日 9月 4日 6月24日 6月11日 5月29日 10月 2日 通期 通期	NPOセンター 〃 東京 高松市 岡山市 岡山市
⑤環境ボランティアの育成			
⑥会員の資質向上を図る事業	環境・循環型社会・生物多様性白書を読む会 参加（環境省中四国事務所主催） 環境学習指導者養成スキルアップ講座（環境保全事業団主催）	6月30日 6月14日	岡山市 岡山市
⑦その他本会目的のための事業	江田環境大臣との環境懇談会 E A 2 1 全国交流研修大会準備会	7月10日 7月28日	岡山メルパルク 岡山市

環境カウンセラーとして思うこと

岡山環境カウンセラー協会 三宅 康裕

OPECAのみならず、日頃より、ご自分の専門分野を活かし、様々な技術的なサポートをなされている事とおもいます。

私も環境カウンセラーとなって数年がたちますが、以前より気になっていることを書いてみたいと思います。

私も多くの皆さんと同じように、自己紹介に名刺を使っています。仕事から必要なわけではないのですが、名刺には資格も記載しています。以前の仕事で必要に迫られ取得した国家資格もあれば、半分趣味でとった任意団体の認定資格もあります。いくつかある資格の中で、名刺交換の際、相手方が最も興味を示すのが、環境カウンセラーではないかと感じています（弁護士や博士でも持っていれば違うのかもしれませんが）。

資格、資格と書いていますが、ご承知のとおり環境カウンセラーは人材登録制度であり、国家資格ではありません。また、登録された方について活動の場を保証する制度でもありません。

しかし、一般の人にとって見れば、中身はきちんと理解されていないとしても、“環境カウンセラー”は、かなり高い注目を集める言葉であることには変わりないでしょう。すなわち、私たちは世間から、環境分野のエキスパートとして見られている訳であり、もう少し違った見方をすれば、私たちの環境分野における活動に伴う責任はとても重大だといえるのではないのでしょうか。

もちろん、みなさんは、それぞれ磨いてきた分野でのエキスパートであると思います。しかしながら、多くの一般の人々は、環境分野が実に多彩で、各々専門性が高いことを知らないため、環境カウンセラーは環境分野に関しては、あらゆる面でエキスパートであると思っているのではないのでしょうか。（中にはそんなスーパーマンもいらっしゃるかもしれませんが。）

そして、もう一度、環境カウンセラーの必要条件を見てみると、

- ①環境問題や環境保全に関する基本的な知識を有すること。
- ②環境保全活動に関する相当の知見と経験を有すること。
- ③上記の知識と経験を活かし、環境保全活動に関する相談に対し、行いうる資質と能力を有すること。

と、3つの条件が示されています。①では基本的知識としていますが、②では、相当の知見と経験としています。環境保全に関する知識は仮に基本までであっても、環境保全活動については、「相当」の知見と経験が必要。「相当」、大辞泉では「物事の程度が普通よりはなはだしいさま」とあります。そして、これら知識と経験を活かしてカウンセリングを行える。書き出しの①ハードルはそう高くはなさそうに思えますが、②ではとんでもなく上がっています。

今まで生業や私的な活動で多くの経験をつんできた分野では、もちろん適切なカウンセリングが可能かと思えます。しかし、100%自分にマッチングする課題のみ問いかれるわけでもなく、さらに、新しい科学的知見が次々に加えられ、それに伴う社会環境も目まぐるしく変わる現代の環境問題では、放っておくと自分が培ってきた知識が陳腐化し、ますます自己の得意分野とのマッチングが難しい事態に陥ってしまうのではないのでしょうか。

では、どうやってそんな事態にどう対処していくのか？

あらためて物事と真摯に向かい合うクリアな目と、知識、知見に関する継続的な自己研鑽が求められるのではないかと思います。

私たちは、新しい物事や分野と向かい合うとき、新しい知識を得ることが当然必要となります。近頃は、インターネットやマスコミなど多すぎるといっていいほどの情報が溢れ返っていますが、多くはそこから情報を得ることになるでしょう。そのとき、よくよく冷静に基本的・本質的な部分から見直せば中にはおかしなものがあること気づくはずなのに、あまりの情報の多さに「わかりやすく」「受け入れられやすい」もののみを受け入れてしまい、物事の本質から離れて信じてしまうケースがあります。いわゆる象徴的貧困といわれる現象です。

環境に関することを考えるとき、科学的な基礎を切り離すことは難しいことですし、切り離してしまえばまたにあふれる「トンデモ科学」に傾倒してしまう可能性すらあります。ある物事にあたるときは自分の意見とは違う対論についてもある程度理解しておくことが必要でしょうし、自己の意見および対論が、科学のどのような基礎に立脚しているか今一度冷静に考えておく必要があると考えます。といっても、難しい理論ではなく、科学の基礎的な部分についてで十分なはずです。

たとえば省エネや地球温暖化対策、循環型社会の問題を考えるとき、LCAの考え方ははずせない（環境にやさしいと思っている行動が、入口から出口まで考えたとき、実は返って環境負荷になっていないか）でしょうし、ビオトープなどを通して生物多様性の保全を考えるとき、外来生物はもちろん、ホタルや希少淡水魚の安易な移植が引き起こす国内移入種も問題となっています。愛知県や滋賀県では環境省レッドリスト絶滅危惧Ⅱのオヤニラミも移入種として規制あるいは注意喚起の対象としており、ホタルの移植では、ホタルそのものの遺伝子汚染も問題ですが、ゲンジボタルの餌となるカワニナの遺伝子汚染やよく似た外来種であるコモチカワツボの移入も問題視されており無視できません。生き物たちの復活を望むなら、なぜ、いなくなったのか、いなくなった時点はいつで、今の環境

はかつて見られたころの環境とどう変わってきたのか、いなくなったころの環境と今の環境はどう変わったか、仮に移植するなら生態系にどんな影響を与えるのか、持続可能性をどう担保するのかなど、さまざまな視点で検証を始めることがまずは必要となるはずです。水質保全に関しても、一般の人々は、富栄養化と農薬など化学物質汚染を混同してしまいがちですし、自然浄化作用にも見られる物理的な作用（水による希釈・拡散や沈殿など）、そして、化学的な作用（酸化、還元、凝集、吸着など）、生物学的な作用（生物による吸収・分解）を踏まえた対応策を検討する必要があります。

また、他のいくつかの資格では、ここ数年、知識及び技能の水準の向上と、資質の向上を図るため、CPD（継続教育）制度が重視され、義務化あるいは努力義務化されています。環境カウンセラー制度は、更新制度を持っているため、自己研鑽についてある程度は考慮されていると見るべきかもしれませんが、目まぐるしく変わる世の中の課題とニーズに答え、カウンセラーとしての責務を果たすためには、継続教育は不可欠であると考えます。

これまで書いてきたことは、日夜ご活躍中のOPECAのみなさまには釈迦に説法な事柄でお恥ずかしい限りですが、私たちが社会的影響の大きい環境カウンセラーの看板を掲げ、社会貢献を果たしていく必要がある以上、常に心に留め置いておく必要があると思い自戒の念を込めて書かせていただきました。

『20年後の我が町を東北から見つめて！』

岡山環境カウンセラー協会 賛助会員 道廣 和男

暑い日が続いていると思っていましたが、気がつくとも秋の気配です。

8月下旬に東北松島に勉強会で訪問して、その足で松島から、岩手県の県境ぐらまで北上しました。その時に『20年後の我が町を東北から見つめて！』との表題を思いつきました。この東北の惨状を見ていると20年後の我が町の姿を強烈に考えさせられるような気がしました。

日本の田舎街はどのような姿が理想的かと考えることが有ります。日本国土が海外諸国と比べて海に囲まれているため、諸外国と違った国防、治水、農業政策、都市計画が必要であるのではないのでしょうか。

それから危惧していることは、今の日本は平和呆けのため、自分たちで国を憂い立ち上がることも出来ないぐらい牙を抜かれた愚かな国民になり下がっているのではないかと。諸外国であれば、暴動が起こっても可笑しくないレベルではと思うのです。さらに、東北大震災でも、毅然とした国民性と海外から評価され、両手を上げて喜ぶのが滑稽に見えました。従順な待ちの姿勢ではなく、これからの日本をどのように変えていくか、自分たちの力で何らかの自発的な行動を起こすことが出来ないかと考えて活動しております。

そんなさなか、三井物産東北復興補助金総額6億円が有ることを知り7月末に応募しました。最新の情報を結集して提出したプランも、我々の持つ情報とは異なり、緊急性が共感されず、採用されませんでした。東北の瓦礫と惨状を拝見すると何とかしたいと思いますが、規模があまりにも広く、現実的な復興の優先順位が見えにくいのが現実かもしれません。

しかしながら、今の東北を復興出来なければ、将来の日本も安泰ではないと強く危惧しております。そこで、自分たちの仕事の範囲、仕事で影響を与えられる範囲、何らかの支援が可能な範囲を広げていくと、いろんな可能性が有ることには間違い有りません。

我々の社会貢献のプランは、東京のハイテク情報サービス（梱包革命ハイテククッションで2011年9月よりアメリカ市場開発のスタート）へCO₂削減計画の推進過程で、知人2人を会社の顧問に推薦したところ、スムーズに快諾いただき、社長の知人1名を加えて、3名の顧問と社長及び道廣5名で会議及びメール等で自分たちで出来る社会貢献の情報交換で、

企業方針から環境分野で何とか自分たちで出来る活動をしたいとの意味から、手始めに三井物産に『東北瓦礫処理ハブ化プロジェクト』の取り組みが決まり、企画書を作成しました。鳥取の石井顧問の支援先に焼却炉及びウィルス対策素材（抗ウィルス素材「BR-p3」）の開発製造販売の株式会社モチガセがあることから、社会貢献の方向性が決まりました。<http://www.mochigase.co.jp/>

このプロジェクトは、当初は東北エリアに移動式焼却炉を設置して移動しながら瓦礫焼却を進めるプランでしたが、焼却灰に放射能が残存することから現状では、瓦礫の焼却そのものが困難なため、情報収集にとどめています。



女川病院から見た被災した街並み

瓦礫を放置しても現状ではやむを得ないかもしれませんが、瓦礫には栄養豊富なヘドロが多く、昆虫が大量発生中です、其れを餌にする、シベリアからの渡り鳥により、鳥インフルエンザのパンデミックが想定されています。渡り鳥の糞に含まれる鳥インフルエンザ・ウィルスは東北の野鳥やゴキブリ等を介して豚舎の豚の感染で、人間に感染する鳥インフルエンザに突然変異すると言われていました。放射能以外にも全世界に影響を与えるパンデミックの懸念が東北の瓦礫には潜んでいることが懸念されています。ウィルス専門家によると、もし、鳥インフルエンザのパンデミックが発生した場合の対象者の規模は放射能の脅威を超える、数百万人が想定されるのです。



大曲のがれきの山を眺めて

* 鳥及び新型インフルエンザ海外直近情報集
サイト <http://panflu.world.coocan.jp/>

2011, 9, 18最新情 (<http://panflu.world.coocan.jp/jyouhou/BIRDFLU/2011/RobertWebster.pdf>)

そのため、この社会貢献計画の緊急性を再検証して、現在は殺菌のために消石灰が散布されていますが、残念ながら消石灰ではウィルスの完璧な滅菌は困難なようです。そこで、鳥インフルエンザ・ウィルスのより滅菌効果の有る薬液が探されています。このたびウィルス学会で滅菌効果を検証された薬液（抗ウィルス素材「BR-p3」）の効果の現地被災地での瓦礫への検証を早急を実施することを考えています。

このプロジェクトは近々、薬液（抗ウィルス素材「BR-p3」）の散布で鳥インフルエンザのパンデミックの予防活動をします。

そこで、多くのチャンネルでアピールして、全国のキーマンと上手く繋がらないかと考えて人脈を駆使して動いています。当初は、ゼネコンとの連携の話もあり、情報交換をしましたが、この場合会社の経営状況に影響を受け、方向性が狂う懸念が有り断念しました。今後の活動の方法は、経営状況に影響を受けにくい、産官学の共同の支援を軸にするのが良いとの考えです。

今後、東北の大学と連携プロジェクトにして、英知を結集したトライアルモデルを模索中です。つまり、東北の大学、行政機関、マスコミ、企業及び個人との幅広い協業でのプロジェクトに展開する方向です。このプロジェクトに多くのアイデアを募り、東北の瓦礫のヘドロから発生する鳥インフルエンザ対策を最優先テーマとして活動をします。微力ですが関係者で人脈を駆使してプロジェクト遂行を推し進めたいと考えております。

田舎の岡山県備前市から、全国活動するコンサルタント及びISO審査員として数多くの産業や企業を拝見してきました。今の東北を見つめていると我が町の20年後の姿とリンクしてきました。自然災害の極めて少ない岡山では、自然の脅威を感じることは少ないのですが、東北震災を我が身に振り掛かるだろう将来起こり得るリスク（地元主導で何も出来ない、何でも国主導の考え方では駄目だ！）と考え、地元でも具体的な何らかの活動に変えて行けないかと日々研鑽しております。

皆様方のお知り合いの方々に、ご相談出来るキーマンがいらしたらご紹介くださいませ。この度は紙面を提供いただき有難うございました。

体験学習～ミミズのカーロ～に想いをよせて

岡山環境カウンセラー協会 顧問 福留 正治

今年も岡山県ひろば事業、鬼が笑う平成24年度環境学習教育事業提案書を県へ提出する季節がやってきました。過日「ひろば運営委員会」が開催され、応募された8件全部を提案することになりました。夫々が想いのこもった、未来を見据えた、持続可能な社会を目指している提案書です（詳細は、ひろば事務局アスエコ）。8件とも全てにわたって県の理解が得られることを願うばかりです。

もうかれこれ10年以上前になりますが、環境教育学習の必要性が盛んに叫ばれていた頃、カーロプロジェクトに関わったことを思い出します。それは一冊の本（「みみずのカーロ」今泉みね子著）から始まりました。

ドイツにフライブルグという都市があります。環境の町として世界的に有名な街です。包装紙を使わない、食べ物は全てバラ売り、必ず買い物袋を持って買い物に行く、車よりも市電に乗る方が得する、分別は完璧、ポイ捨てなどは全くない、市民全員が環境に対してとても高い意識を持っている都市です。フライブルグは高度な意識を持った市民によって作り上げられている環境都市なのです。

このフライブルグの近くにメンディンゲンという人口2500人の小さな町があります。ライン川のほとりにあって、草地や畑に囲まれ、ワイン用のぶどう棚が列をなして、平野の所々に小さな森がある南ドイツの美しい町です。この街にあるたった一つの小学校「メルディンガー小学校」の話です。この小学校のシェーファー先生が子供達にごみ問題をぶつけたのです。ごみが大量に埋め立てられているけれどこれでよいのか、ごみはどうして出るのか、ごみを減らすにはどうしたらよいのか、皆で考えてみよう。子ども達は考えました。そして実行しました。お弁当のサンドウィッチの包装紙を使わないようにお母さんに頼んだり、何回も使える弁当箱に入れてもらったり、飲物はガラス瓶に入れて持ってきたり、いろいろ工夫を重ね実行した結果、学校に沢山あったごみ箱がたった一つになったそうです。

ある日、この学校に「ミミズのカーロ」がやってきました。それまで食べ物の残りは校庭の隅に埋めてコンポストにしていたのです。ご存知のように食べ物は地中のバクテリアによって分解されるのですが、なかなかその様子を目で見ることは出来ません。そこで、シェーファー先生は「カーロ」という名前を付けたミミズを子供達の前に出現させたのです。

カーロの動く様子が観察できるようにガラス箱にして、飼育箱にも工夫をこらしました。勿論のこと食べ残しを主に飼育箱に入れるのですが、外にも鉛筆の削りカス、紙屑、プラスチックのかけらやガラス片、スチール缶のかけらまで入れて観察させています。カーロが食べるものは何で、食べないのはどれか、を観察させているのです。

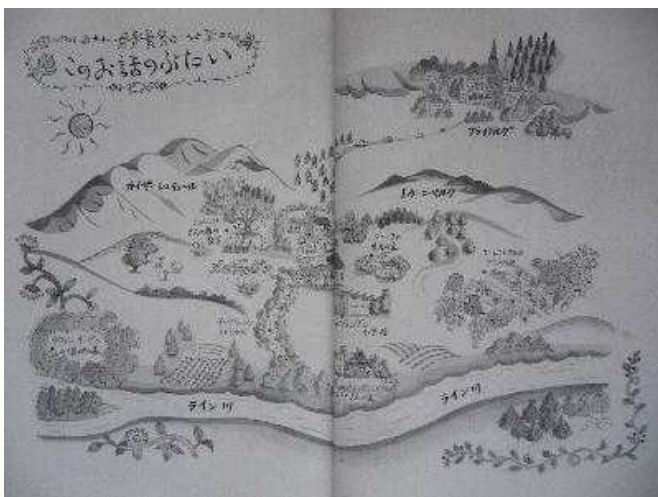
「ミミズのカーロ」は色んな授業科目でも活躍しました。ミミズによる環境教育は大きな効果をもたらしました。ドイツ市民の環境意識レベルの高さはこのようにして育まれているのです。

10年以上も前に「ミミズのカーロ」が日本へもやってきました。その時、「カーロプロジェクト」が発足したのです。中心になった方はGSP（グローバルスクールプロジェクト）の素晴らしい若い女性ジャーナリストです。全国のあちらこちらにある学校の先生方が参加してきました。幼稚園から高等学校まで幅広い層に亘っています。先生方はミミズの飼育による観察がいろんな場所で子供達に大きな影響を与えていることを実感し始めました。ミミズの卵を初めて見たとっては感激したり、白い紙を食べるとミミズは白いウンコをすとか、水をやりすぎて溺れて死んでしまったとか、コーヒーのビンで飼育したら死んでしまったことなど、賑やかな報告がたくさん公開されました。ある合宿勉強会に参加したとき、特殊学級を担当している女の先生がミミズの観察のことを拙い文章にして表現してくれた学童のことを話してくれました。目を輝かせて分からない字を聞きながら一生懸命書いてくれたそうです。先生方は「ミミズのカーロ」にこれからの教育のあり方、子供達の未来を見出そうとしているようにも見受けられました。

環境教育、人間教育が規模は小さくとも日本のどこかで着々と芽生え始めたことを実感しました。こんな子ども達が育った何年か後にはきっと「ポイ捨て」や「不法投棄」の無い日本がやってくるに違いありません。そして日本国民の環境意識レベルも更に向上することでしょう。

小さいときに育まれた精神はその国の未来の姿になります。リーダーである大人達はその責任を強く感じなければなりません。そして、環境問題解決を自分の力で考えて、実行出来る市民が多くなればドイツのような、スウェーデンのような高度な環境意識を持った市民層が誕生し、環境先進社会をつくり上げることが出来るのだと思います。本質を欠いたサル真似だけでは持続可能な社会はつくれません。

あれからもう10年以上が経ちました。少しずつ変わり始めているのでしょうか。OPECA会員の皆さんの努力がようやく実り始めてきたのでしょうか。ますます深刻化する異常気象、東日本大震災、再度襲った大津波、そして人災とも言われる原発事故が起きてしまった、こんな今だからこそ原理原則を大切にしたい正しい環境学習教育が求められているのだと思っています。



参考文献（上の本）「みみずのカーロ」 今泉みね子 著

「だれでも出来る楽しいみみずの飼いか方」



合同出版

中村好夫 監修

合同出版

現在の活動について（報告）

岡山環境カウンセラー協会 会長代理 三宅 直生

最近、目がうすくなり、コンピュータに向かったり、本を読むことが少なくなっていました。特に暗くなると本を読む気になれず困っています。コンピュータに向かうと、ついTVやゲームを立ち上げることが多く、「もう少し、しっかりしろ」と自分を叱咤する日々が多くなっています。

最近購入した本3冊「限界集落」「食糧自給率の罨」「働かない蟻に意義がある」これを読むのに3ヶ月以上かかっています。以前だと1週間もあれば読んでいただろうと思う今日この頃です。これまた、すっかり老眼が進んでしまった妻の使えなくなった老眼鏡を借りて少しずつですが読むように心がけています。最初に挙げた本は記者が取材をもとに書いたもので、後の2冊は学者が書いたものです。

さて、記者と学者といえ、東日本大震災での彼らの言動を批判する人も多いようですが、前述の本の著者は、真摯な努力で現実をきちんと評価しておられるように思えました。

講義・講演用の文章を作ったり、パワーポイントの作成や整理をしようとコンピュータのスイッチを入れても、なぜかメディアセンターをクリックしてTVをみることの多い今日この頃ですが、震災関連以外では「9.11同時多発テロから10年」、「米国国債の格下げ」、「ヨーロッパの債務危機」が毎日のように目に飛び込んで来て、時代の変わり目に生きていることを実感しています。

それらを見るにつけ、私は自分がすべきことは「持続可能な社会」を目指し、「自分で考え的確な判断ができる人材」を育成することであると思っています。

今年度も、福祉施設、津山市社会福祉協議会、岡山市環境保全課等との協働で「おいしく、楽しく」をモットーに岡山市、津山市を中心に数多くの環境学習・リサイクル交流会を開催している最中です。

右下の写真は津山市立加茂中学校で福祉施設「かけはし」および津山市社会福祉協議会と協働で開催した環境学習交流会の様子です、この時は津山市社会福祉協議会の担当者のお取りはからいで10名弱の大学生の参加がありました。

地域のお年寄りや障がいを持った人、津山工業高校の生徒、岡山県立大学、高知県立大学など県内外の大学生など様々な立場、年齢の人が一緒に環境を学び、リサイクルの実践とおして交流をしました。「交流をおして思いやりの心と希望を育もう」という目的を少しは果たしているのではないかと考えています。

「格差が広がり、経済効率と目先の成果ばかりが優先されるようになった」といわれています。私も同感ですが、これは今に限ったことでなく、時代（社会）の変わり目はこのようなことが、いつの時代もあったのではないのでしょうか。

「9.11同時多発テロから10年」、「米国国債の格下げ」、「ヨーロッパの債務危機」などは、石油の枯渇と深い関連があると私は考えています。

大量消費の社会システムは石油が無限にあることが前提であり、大量消費社会における経済の右肩上がりの成長は、人口がいつまでも増加することが条件となっているような気がしてなりません。

地球の資源は有限であり、地球には定員があるはずですが、エコロジカル・フットプリントという指標が正しいかどうか私の能力では判定できていませんが、この指標によると1980年代後半に地球は持続可能では無くなっています。

そこで、最近の講演などで訴えていることのひとつが、「燃やす油を節約しよう」ということです。エネルギーとしての石油を節約し、原料としての石油の割合を増やそうというものです。

化学物質を嫌い天然由来のものを好む傾向が強まっていますが、例えばゴムをすべてゴムの木からの天然ゴムにすると、ゴムの木を栽培する面積は現在の2倍以上になります。また、合成繊維をやめて全て綿や羊毛などの天然繊維にすることを考えてみましょう。どれだけの綿花畑や牧場、そして水が必要となるのでしょうか。



環境学習交流会の様子



人間には、まず食べ物と飲み水が必要です。地球の人口が急増している今日、まず食べ物を作るための水と土地の確保が重要です。このことを伝える活動も始めました。

前頁の写真は先日の台風の後の吉井川です。石油をこのような姿にして川や海の生き物に害を与えてではなく、何度も利用し、最後の最後にせめて熱として回収できるような社会にしたいものです。

最後になりましたが、今しなくてはならないと思ってることは、前号でも触れ、環境大臣との懇談会でもしゃべったように、震災の支援に向け行動を起こすことです。自分や周りの人のスキルアップを目指し、次のような活動を考えて行動に移しています。

1 概要

- (1) 冬に向かいペレットストーブ（薪兼用で電気不要タイプ）とペレットコンロを被災地の施設または団体に寄贈する。
- (2) 県立津山工業高校の生徒が製造している木質ペレット200kg程度をペレットストーブおよびペレットコンロにつけて寄贈する。

2 目的

(1) 短期的目的

- ①被災地支援および被災地との交流による人間的な成長を目指す。

福祉施設等では震災などにより様々な困難に直面していることが想像されます。また、避難所から仮設住宅への移動によりコミュニティが崩壊し、孤独に悩む人も多いようです。

私たちは、福祉施設等へペレットストーブに燃料をつけて寄贈し、寄贈時にお菓子作りなどを通して交流を行うことで被災地支援とともに、関わった人の人間的な成長を図りたいと考えています。（しかし、ペレットストーブは危険であるとみなす自治体もあり、実現は困難か？）

- ②木質バイオマスの活用促進を図る。

特に大量に発生している廃木材の有効利用を進めるため、ペレットストーブ（薪兼用木質用ストーブ）を提供することで冬期対策支援の一例になれば幸いです。

(2) 中長期的目的

- ①バイオマスの活用とエネルギーの地産地消を目指す取り組みを全国に発信する。

→ 背景 ・東北地方には森林資源が多く木質ペレットも製造されています。
・震災のがれきには木質も多いことは私どもの現地調査でも確認しています。
・石油と異なり地域でお金が循環するバイオマスの方が被災地を含め地方振興のためには有効である。（寒くなり被災地では石油ストーブの販売が前年比激増）

- ②高校生が製造しているペレットが被災地で使ってもらえることで、高校生が「社会に役立つ」取り組みを実践していることを実感できる。

→ 背景 ・これまで、「環境保全をとおして社会に役立つ」ことを目指して様々な取り組みを実践してきて、各方面から高い評価を得ています。さらに、このような全国的な取り組みにすることでレベルアップを図ることが出来ます。

* 被災地の行政は、おそらく平成の大合併で人員が整理され、一人あたりの業務量が増えていた中で、被災された人も多く大変なことが推察されます。何とか負担をかけないよう努力しています。

★平成23年度3R推進中国四国地方大会について（報告）★

倉敷市のご依頼により、10月2日の3R推進中国四国地方大会（環境省共催）に出展参加しました。当日は岡山エコ検定（環境クイズ）および震災パネルの展示を実施し、エコ検定は大盛況で午前中ははてんてこ舞いの状況でした。

藤本会長の倉敷ケーブルテレビ出演の他に倉敷市長の激励もありました。これらは当協会のアピールになり、大変有意義なものとなりました。

エコ検定の景品として、明和製紙株式会社からはトイレットペーパー、当協会会員の内藤氏から環境グッズの提供があり、参加者からも喜んでいただきました。



倉敷市長との記念撮影



エコ検定の様子

発行：岡山環境カウンセラー協会 ホームページアドレス <http://www.opeca.jp/>

本部 〒700-0925 岡山県岡山市南区妹尾2618大成化工ビル4F TEL：086-282-8727

FAX：086-282-8727

E-Mail：info@opeca.jp

倉敷事務所 〒712-8015 岡山県倉敷市連島町矢柄5832-9 福留方 TEL& FAX(086)446-0880

発行人：藤本晴男

編集人：三宅直生